

茂林寺と分福茶釜

はじめに

青龍山茂林寺は、群馬県館林市堀工ほりくにある曹洞宗寺院で、分福茶釜の寺として知られている。分福茶釜とは、いくら湯を汲んでも尽きない不思議な釜で、当寺に長く住した守鶴という老僧が愛用した品である。この分福茶釜は、寺社縁起の定着化やお伽噺の童話化等、様々な問題をはらんでいる。本稿では、この分福茶釜の由来と、その伝播について若干の考察を試みたい。なお、「分福茶釜」は通常「文福茶釜」と表記される。しかし、茂林寺では茶釜が福を分け与えることから「分福茶釜」であるとしている。よって、本稿では、茂林寺のように「分福」と明確に意識されている場合には「分福茶釜」と表記し、それ以外の場合には「文福茶釜」と表記するものとする。

一 茂林寺と分福茶釜

分福茶釜について触れる前に、まず茂林寺の概況を述べておく。茂林寺は曹洞宗の名刹であり、開山を大林正通とする。正通は美濃国土岐氏の出自で、華叟派の祖、竜泰山開山華叟正尊しやうかくの法嗣である。寺伝によると、正通は諸国行脚の折、上野国に立ち寄り、伊香保山麓で守鶴と出会った。この守鶴は、のちに茂林寺に分福茶釜を持ち込んだ老

榎 本 千 賀

僧である。応永三十三年（一四二六）、正通は守鶴を伴い、館林の地に來住し、小庵を結んだ。応仁二年（一四六八）、青柳城主赤井照光は、正通に深く帰依し、自領地の内八万坪を寄進し、小庵を改めて堂宇を建立し、青龍山茂林寺と号した。照光は、自ら当寺の開基大檀那となり、伽藍の維持に務めた。大永二年（一五二二）には、後柏原天皇から勅願寺の綸旨を賜った。⁽¹⁾その後、当寺は一時衰退したが、永禄年間（一五五八〜七〇）、長尾景長が再興した。寛永十九年（一六四二）には、三代将軍徳川家光より二十三石四斗余の朱印を下賜された。

茂林寺は現在、以下の直末十八ヶ寺を持つ。

- 松林寺（群馬県邑楽郡明和村大字大輪）
- 竜泉院（群馬県邑楽郡大泉町上小泉）
- 高源寺（群馬県邑楽郡邑楽町狸塚むらつか）
- 竜興寺（群馬県館林市大字高根甲）
- 法輪寺（群馬県館林市朝日町）
- 雲竜寺（群馬県館林市大字下早川田）
- 常光寺（群馬県邑楽郡明和村大字大輪）
- 普濟寺（群馬県邑楽郡明和村大字江口甲）
- 洞源寺（群馬県邑楽郡千代田村大字萱野）
- 宗竜寺（群馬県邑楽郡明和村大字南大島）
- 幸福寺（埼玉県南埼玉郡菫蒲町大字下栢間）

源長寺（埼玉県羽生市大字藤井上組）

慶徳寺（埼玉県比企郡滑川村中尾）

大円寺（東京都文京区向丘）

宗慶寺（東京都台東区下谷）

長昌寺（東京都多摩市）

常楽寺（長野県中野市栗和田）

竜洞院（長野県上田市蒼久保）

この直末寺院は近世を通してほとんど変動がなく、現在は門葉諸寺院を併せて百八ヶ寺を擁している。

さて、茂林寺では、現在、分福茶釜を什物としているが、茶釜を当寺で所持するに至った経緯は、以下の通りである。開山大林正通に従って、伊香保から館林に來た守鶴は、代々の住職に仕えた。元龜元年（一五七〇）、七世月舟正初の代に千人法会があり、大勢の來客を賄う湯釜が必要となった。その時、守鶴は一夜のうちに、どこからか一つの茶釜を持ってきて、茶堂に備えた。ところが、この茶釜は不思議なことにいくら湯を汲んでも尽きることがなかった。守鶴は、自らの茶釜を、福を分け与える「紫金銅分福茶釜」と名付け、この茶釜の湯で喉を潤す者は、開運出世・寿命長久等、八つの功德に授かると述べた。その後、守鶴は、十世天南正青の代に、熟睡していて手足に毛が生え、尾が付いた貉（狸の説もある）の正体を現わした。これ以上、当寺にはいられないと悟った守鶴は、名残を惜しみ、人々に源平屋島の合戦と釈迦の説法の二場面を再現して見せた。人々が感涙にむせぶ中、守鶴は貉の姿となり、飛び去った。時は天正十五年（一五八七）二月二十八日で、守鶴が開山大林正通と小庵を結んでから百六十一年が経っていた。

以上が茂林寺に伝わる分福茶釜の由来であるが、群馬県下には、茂林寺以外にも分福茶釜の由緒を説く寺院がある。その寺院は、次の五ヶ寺である。

① 高源寺（曹洞宗、邑楽郡邑楽町狸塚）

② 嶽林寺（曹洞宗、利根郡月夜野町月夜野）

③ 青龍寺（廃寺、吾妻郡吾妻町岩下）

④ 中台寺（天台宗、伊勢崎市大手町）

⑤ 応声寺（時宗、館林市西本町）

① 高源寺は、茂林寺の末寺に当たる。安永八年（一七七九）から文政三年（一八二〇）にかけて著された随筆『一話一言』（大田南畝著）巻四十一「狸塚」には、

上州館林茂林寺（禪宗）より一里ばかり西に狸塚（イヌヅカ）といふ村あり、一村（一）狗を畜ふ事を禁ず、高源寺といふ寺あり、茂林寺の末寺也、かの文武火の茶釜は式斗ばかりもはいるべき大きなもの也、蓋はなしと云、高源寺開山を正鶴（ただね）といふ、今より二百八十年ばかりもむかし也と、狸塚のもの丈物語り（以下略）

と記されている。また、『群馬の歴史と伝説民話』の「分福茶釜うらばなし」、『群馬県史』の「高源寺の和尚」、『館林・邑楽の民話と伝説』の「分福茶釜異聞」等には、次のように記されている。高源寺の和尚守鶴が狸（または貉）の正体を見破られる。守鶴は日頃、大切にしていた茶釜を持って、茂林寺へ逃げる。その際、釜の蓋を落としてしまうというのである。高源寺には、現在、釜の蓋はなく、守鶴が果して、歴代の住職であるのかはわからない。しかし、ある寺院にいた守鶴が、茶釜を茂林寺へ持っていったという伝説は、①高源寺だけに留まるものではない。

② 嶽林寺では、しかく和尚（6）が、③ 青龍寺では、四角和尚（7）が、それぞれの寺院から茂林寺へ茶釜を持っていたという。④ 中台寺では、いたずらばかりする狸を当寺から追い出した。狸は館林の寺院へ行き、そこでもいたずらが絶えないので、とうとう屑屋に売られ、綱渡りの芸をしたという。町の古老の話によると、⑤ 応声寺にも釜があり、ある住職が誰かに釜を譲ったのだという。なお、⑤ 応声寺では、分福茶釜の由来を述べた「貉書六字名号縁起」を所蔵しているが、この縁起に関しては、次章で取り上げる。現在、③ 青龍寺は廃寺であり、② 嶽

林寺と④中台寺、⑤応声寺には茶釜はなく、②嶽林寺と⑤応声寺側では茂林寺と茶釜の伝説を伝えてはいない。しかし、茂林寺を含めた六ヶ寺に同様の伝説があることは看過できない。これら六ヶ寺は、群馬県にある。なぜ、群馬の地に分福茶釜の伝説があるのだろうか。

茂林寺所蔵の分福茶釜〔写真1〕は、千五百年以前に中国で造られたと伝える。釜質は紫金銅、周囲は四尺、重量は三貫目、容積は一斗二升、口縁は八寸の真形釜である。真形釜とは基本的な釜の形で、現在、釜には蓋が付いているが、蓋は後に新しく造られたものだという。群馬県の輪郭は、しばしば鶴が両翼を広げて舞う姿にたとえられる。そのうち茂林寺のある館林市は、鶴の頭部、つまり県の東端に位置し、北は栃木県佐野市、南は埼玉県羽生市と接している。栃木県佐野市は中世から梵鐘、鰐口、鳥居、刀剣のほか、鍋、釜等の日常品から鋤、鍬等の農具まで生産していた。特に釜の名産地として知られ、西の蘆屋釜とともに、佐野(東)の天明釜(天命釜・天猫釜ともいう)は二大釜と称せられた。群馬県邑楽郡明和村南大島では、佐野の鋳物師屋から、狸が茶釜を買ってきて高寺(①高源寺)に泊ったという伝説を伝え、分福茶釜と佐野が結びついている。後述するように、分福茶釜の話は、群馬県独自のものではない。しかし、茂林寺や高源寺をはじめとする六ヶ寺が分福茶釜を伝承する背景には、近くに釜の生産地佐野があるという地理的要因が考えられるであろう。



〔写真1〕 茂林寺蔵 分福茶釜

二 茂林寺の開帳と略縁起

本章では、近世における茂林寺の活動と分福茶釜の流布を取り上げる。近世にはいと、寺社では、しばしば開帳を行った。開帳とは秘仏の帳を開いて、信者と秘仏との結縁の機会を与えることである。当初は信者と秘仏との縁を結ばせようとするものであったが、幕府の寺社への経済的援助の減少もあって、次第に寺社の造営・修復費用を得るものへと変わっていった。茂林寺においても、天明五年(一七八五)と寛政十二年(一八〇〇)の二度、開帳をしている。斎藤月峯著『武江年表』の「天明五年(一七八五)」条には、

同日(六月十五日)より、七月二十四日迄、本所一ツ目八幡宮旅所にて、上州館林茂林寺十一面観世音開帳(守鶴が分福茶釜を見する)。

とあり、本尊十一面観音の開帳とともに、分福茶釜の公開が行われた。また、寺社奉行所の開帳公式記録『開帳差免帳』(国会図書館蔵『旧幕府引継書』所収)の「寛政十二年(一八〇〇)」条には、

上州邑楽郡堀工村

曹洞宗

茂林寺

病氣付代

文英

諸堂并什物等及大破、修復難叶自力ニ付為助成、開山護持仏觀世音并靈宝等、来ル七月朔日ヨリ九月朔日迄六十日之間、於目白新長谷寺境内、開帳いたし度旨、当中閏四月中、植村駿河守方江願出、同五月六日、脇坂淡路守宅、於内寄合、願之通差免之

とあり、諸堂修復のため、新長谷寺において観音と靈宝の開帳をしている。下って、弘化元年(一八四四)の秋、茂林寺では大暴風に見舞われ、守鶴堂が壊れてしまう。そのため、当寺の宝物の展覧会を企画

〔表1〕 茂林寺の縁起

| 年次 | 西暦 | 資料名 | 形態 | 所蔵者名及び所収資料名 | モチーフ |
|--------|------|--------------|----|------------------------|---------------------------|
| 天正十五年 | 一五八七 | 分福茶釜略縁起 | 一丁 | 都立中央図書館蜂屋文庫蔵『縁起叢書』第十三冊 | (2)(3)(5)(6)(10) |
| 享保十年以降 | 一七二五 | 文福茶釜由来 | 一冊 | 東京大学附属図書館蔵 | (1)(2)(4)(6)(8) |
| 寛政十二年 | 一八〇〇 | 観世音菩薩略縁起 | 三丁 | 国会図書館蔵『諸国寺社諸縁起』第五冊 | なし |
| 文政四年序 | 一八二二 | 縁起 | 不明 | 『甲子夜話』卷三十五 | (1) 〃 (9) |
| 年次不詳 | | 分福茶釜略縁起 | 三丁 | 国会図書館蔵『諸国寺社諸縁起』第五冊 | (1) 〃 (9) |
| 年次不詳 | | 分福茶釜略縁起 | 不明 | 岩崎治雄氏蔵・『群馬県史』資料編十六近世八 | (1) 〃 (9) |
| 年次不詳 | | 略書六字名号縁起 | 一卷 | 応声寺蔵・『群馬県邑衆郡誌』 | (1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(10) |
| 明治二十三年 | 一八九〇 | 上州館林茂林寺宝物由来記 | 一冊 | 日本大学黒川文庫蔵『寺社縁起集』第十八 | (1)(2)(3)(4)(8) |



〔写真2〕 茂林寺蔵 展覧会版木（裏焼）

し、翌二年（一八四五）正月に守鶴堂を建立している。当寺所蔵の版木〔写真2〕には、茶釜から頭と尻尾を出した狸の図とともに、次の文章が彫られている。

上州館林在堀工村茂林寺宝物展覧広告

守田宝丹書

今回当寺の重宝、なかなかの有名な分福茶釜をはじめ、和漢の古書画・古器物、及び此他、諸家有名な珍蔵各種数百品を陳列し、来ル月日より月日迄、謹而衆覧に供し候也。

東都浅草 向え

茂林寺宝物展覧会事務所

庚寅 日良旦

文中の守田宝丹は、東京池の端七軒町にある薬局宝丹堂の弘化二年（一八四五）時の主人である。

さて、多くの寺社では、開帳に併せて略縁起を版行している。茂林寺も例外ではなく、当寺の由緒を記した縁起や、その縁起を簡略化した略縁起を数多く遺している。〔表1〕は、それらの縁起を一覧表にしたものである。これらの縁起のうち、『甲子夜話』所収の縁起と

国会図書館蔵「分福茶釜略縁起」、岩崎治雄氏蔵「分福茶釜略縁起」⁽¹²⁾の三本は、本文に全く異同がない。この三本は、同版の略縁起と見て、さしつかえないであろう。国会図書館蔵、及び岩崎治雄氏蔵「分福茶釜略縁起」は、版行年次が不詳である。しかし、同版の『甲子夜話』所収縁起は、文政四年（一八二一）に『甲子夜話』の序文が書かれているので、文政四年以前に版行されたと考えられる。年次不詳の国会図書館蔵と岩崎氏蔵本も、この文政期頃に作られたものである。先述したように、茂林寺では、寛政十二年（一八〇〇）に新長谷寺で、開帳を行っている。この開帳に併せて、国会図書館蔵「観世音菩薩略縁起」が版行されている。前掲の『開帳差免帳』によると、寛政十二年（一八〇〇）には、本尊十一面観音以外に、靈宝の開帳も行われている。この靈宝がどのようなものであるのかは『開帳差免帳』には記されていない。しかし、前述したように天明五年（一七八五）の開帳と弘化二年（一八四五）の宝物展覧会では、分福茶釜が出されている。おそらく、寛政十二年（一八〇〇）の開帳においても分福茶釜が使われたのであろうと推測できる。そうすると、前述した、版行年次不詳の「分福茶釜略縁起」三本は、『甲子夜話』の序文が書かれた文政四年（一八二一）に溯ること二十一年の寛政十二年（一八〇〇）の開帳の際に版行された可能性もあるだろう。

この「分福茶釜略縁起」三本のモチーフは、以下の通りである。

(1) 昔、茂林寺に守鶴という老僧がいた。守鶴は、開山大林正通に従って、館林に来て、茂林寺十世天南正青の時まで茂林寺にいた。

(2) 茂林寺七世月舟正初の時、守鶴はどこからともなく、一つの茶釜を持ってきた。その茶釜の湯は、汲めども汲めども尽きなかった。

(3) 茶釜には八つの功德があり、福を分け与える故に、分福茶釜と名づけた。

(4) 十世天南正青の代に、守鶴は猪（または狸）の正体を現わし

た。

(5) 守鶴は自分は釈迦が靈鷲山で説法した時に末席に連なっており、日本へ来て約八百年になると語った。

(6) 守鶴は人々に名残を惜しみ、源平八島の戦いと釈迦の説法を見せ、寺を去った。

(7) 茂林寺では守鶴を神として祀り、守鶴宮を建立した。

(8) 守鶴の能書があるが、筆跡は消え失せ、直堂の札だけが残っている。

(9) 茶釜の茶で練った、守鶴直伝の妙薬がある。

以上が版行年次不詳の「分福茶釜略縁起」のモチーフである。このモチーフ(1)～(9)以外に、

(11) 文福茶釜に毛が生えた。

という句を伴う縁起もある。「表」は各縁起がどういったモチーフで構成されているかを見たものである。都立中央図書館蔵「分福茶釜略縁起」と応声寺蔵「猪書六字名号縁起」⁽¹³⁾には、(11)文福茶釜に毛が生えたという句が付いている。このうち都立中央図書館蔵「分福茶釜略縁起」の版行は天正十五年（一五八七）である。しかし、この句は後述するが、近世の文芸作品からの影響が考えられ、且つ元禄（一六八八～一七〇四）頃から使われ始めた句である。天正十五年にこの略縁起が版行されたとは考えられない。天正十五年とは守鶴が茂林寺を去った年に当たる。おそらく、この略縁起は天正十五年に仮託して、近世中期以降に版行されたのであろう。応声寺は、第一章で取りあげた時宗寺院で、茂林寺と同じ館林市内にある。応声寺は寺伝によると、徳治元年（一三〇六）に本山に当たる清浄光寺（神奈川県藤沢市）二世真教が建立したのが始まりとされ、最初は長福寺と称した。現在の応声寺に改めたのは正徳年中（一七一〇～一七一六）であるという。しかし、『写真3』応声寺蔵「猪書六字名号縁起」（以下「名号縁起」と略す）には次のように記されている。天正十四年（一五八六）、当寺一世覚阿が十夜念仏をしていたところ、毎夜、法場に茂林寺の僧守鶴が詣で、出離

發書 名号縁起

昔者、我輩、靈寶、秘書、六字、名号、縁起、を、
人皇、百世、正親、院、御、天、止、而、成、十、月、
當、寺、代、覺、阿、上、人、十、夜、入、初、時、念、佛、秘、法、
一、つ、ま、り、い、つ、ま、り、い、つ、ま、り、い、つ、ま、り、
我、等、一、日、毎、日、夜、法、持、守、り、を、守、り、
頭、を、合、掌、又、り、て、落、涙、悔、悔、出、離、
解、脱、と、祈、る、乃、ち、覺、阿、上、人、を、思、ひ、
成、し、ぬ、い、は、依、來、信、を、よ、う、と、被、り、を、何、れ、
あ、ま、り、毎、日、賜、と、た、い、は、當、寺、金、銀、佛、
來、り、を、指、引、い、つ、ま、り、い、つ、ま、り、い、つ、ま、り、
昔、日、よ、く、不、善、を、行、ひ、來、り、を、さ、し、
同、師、共、修、行、を、今、下、に、寺、を、誓、ひ、
深、信、願、の、子、細、く、此、道、佛、法、を、先、
同、く、當、寺、を、定、親、志、願、し、て、殊、々、發、願、

〔写真3〕 応声寺蔵「猧書六字名号縁起」

解脱を祈った。翌十五年（一五八七）、守鶴は再び覚阿のもとを訪れ、「実は自分の正体は猧である。しかし、十夜念仏の列に加わったことで、畜生の身から解脱することができた」と告げ、六字の宝号を本尊に捧げ、分福茶釜を覚阿に奉った。応声寺には、現在、守鶴が書いたという「南無阿弥陀仏」の掛軸がある。応声寺の創建時期は、寺伝と「名号縁起」とでは、百三十年の開きがある。しかし、「名号縁起」に記された天正十五年（一五八七）という年は、茂林寺の寺伝では守鶴が茂林寺を去った年に当たる。「名号縁起」は茂林寺側の伝承に忠実な縁起といえるだろう。逆にいえば、同じ館林市内にある茂林寺の伝承

を、応声寺がうまく取り込み、縁起を作り上げたともいえるだろう。ところで近世には寺社の開帳に併せて、黄表紙、合巻、滑稽本、読本等の小説が数多く出版されたり、歌舞伎が上演されたりした。たとえば、江戸浅草の浅草寺では、近世に三十一回もの開帳を行い、その開帳に伴って黄表紙等の出版が十一回、歌舞伎の上演が三回行われている⁽¹⁴⁾。茂林寺の場合も享保五年（一七二〇）初演の浄瑠璃『双生隅田川』（近松門左衛門作）第四に、「ぶんぶくちやがまにけがはえた。ちやせんでそつてもまだそれぬ⁽¹⁵⁾」という囃子詞が取り入れられているのを初出とし、様々な文芸作品に見出すことができる。志田義秀氏の「文福茶釜の伝説童話」⁽¹⁶⁾には、文福茶釜に関する文献が載せられているが、前章で述べた茂林寺の伝承が必ずしもすべての文芸作品に登場するわけではない。茂林寺の伝承では、老僧守鶴は猧（または狸）の化身であり、分福茶釜は守鶴愛用の茶釜であった。だから、分福茶釜は火に掛けられても、頭や尻尾を出して狸に変身することはなかったのである。しかし、近世の文芸作品の中には、文福茶釜の伝承が一人歩きを始め、守鶴を介在しない別のストーリーに展開しているものも見られる。たとえば、享保年間（一七一六～三六）頃刊の赤本『文福茶釜』⁽¹⁷⁾では、京都東山殿の茶坊主が化け狐を捕えて料理しようとする、狐は文福茶釜に化ける。火に掛けられた茶釜はあばれ、「文福茶釜に尾がはえた、手がでたは、目ができた」と大騒ぎになる。その場を何とか逃げ出した狐は猧に復讐を依頼し、猧は茶坊主に八疊敷を広げるが、逆に生捕られるという内容になっている。また、国会図書館蔵の赤本『ぶんぶく茶釜』⁽¹⁸⁾（年次不詳）は、『文福茶釜』の改作で、狐が猧に変わっている以外は、ほとんど同じ内容である。このように狐や猧、狸が文福茶釜に化ける話は、寛政八年（一七九六）刊の黄表紙『化物小遣帳』下巻、寛政十一年（一七九九）刊の黄表紙『増補分福茶賀問』、文政二年（一八一九）刊の狂文集『四方の留粕』下巻「狸の図賛」⁽¹⁹⁾等、多くの文献にうかがえる。しかし、近世の文芸作品すべてが、分福茶釜と茂林寺との関係が希薄なわけではない。享和二年

(一八〇二)刊の咄本『文武久茶釜』序文⁽²²⁾には茂林寺の名が見え、また、文政三年(一八二〇)刊の俳諧集『文武具茶釜』序文⁽²³⁾には茂林寺側の伝承が説かれているのである。つまり、近世中期以降、茂林寺の伝承を基にした守鶴の伝説と、狸等が文福茶釜に化ける話の二つが混在していたといえるだろう。

前掲の俳諧集『文武具茶釜』は、正体がばれ、茂林寺を去る守鶴を述べた後に、「分福茶釜に毛が生たといふ諺は此時よりいふなるへし、元禄の頃」と記している。この「文福茶釜に毛が生えた」という句は、化けの皮がはげる、正体を現わすことをいうが、俳諧集『文武具茶釜』によると、その句は元禄(一六八八〜一七〇四)頃から使われ始めたという。前掲の浄瑠璃『双生隅田川』や赤本『文福茶釜』等では、この句は囃子詞として定着している。茂林寺との関係の薄い、こうした文芸作品に文福茶釜が盛んに取り入れられていった背景には、元禄期以降「文福茶釜に毛が生えた」という句が一つの流行語としてはやっていたことが考えられよう。また、逆に、こうした句が生み出されるほど分福茶釜の話が大眾に受け入れられていたともいえるよう。

三 昔話「文福茶釜」の分布

茂林寺の分福茶釜は、近代になって巖谷小波の『日本昔噺』に加えられることによって一躍有名になった。小波の『文福茶釜』は明治二十八年八月に発行されたが、梗概は以下の通りである。

昔々、上野国館林という所に茂林寺という寺があった。ある時、この寺の和尚が立派な茶釜を買い求めたところ、この茶釜から頭が出、手足や尻尾が生えた。そこで、和尚は出入りの屑屋に、この茶釜を四百文で売った。その夜、屑屋は狸の化けた茶釜から、これまでのいきさつを聞き、狸を養う代わりに茶釜の芸当をしてもらうことで相談がまとまった。翌日から屑屋は見世物小屋を建て、文福茶釜の綱渡りは大変な評判となった。大儲けをした屑屋は、茶釜に儲けた金の半分を

付けて、茂林寺に納めた。その後、茶釜は手足を出すこともなく、寺の宝物になった。

以上、小波の『文福茶釜』の梗概を記したが、小波の『文福茶釜』は茂林寺の寺伝との関わりは薄く、むしろ近世の赤本類の流れを汲むものであるといえよう。そして、茶釜から顔や手足を出して綱渡りする狸のイメージが広範に定着する要因にもなった。

この小波の『文福茶釜』とは別に、「文福茶釜」の昔話は、全国で広く伝承されている。昔話「文福茶釜」の型の範囲をどのように限定するかは、多くの問題を含むが、本稿では、人間と動物との様々の関わりの中で、動物(狸・貉・狐)が茶釜に化けるモチーフを有するものに絞った。だから、「狐と博労」・「狐遊女」の昔話の中で、動物が茶釜に化けるモチーフがある場合には「文福茶釜」の昔話と見なした。「表2」と「図1」は、主に『日本昔話通観』全三十二巻⁽²⁴⁾に掲載されている昔話「文福茶釜」の分布を見たものである。「表2」の型、及び「図1」の記号は、「文福茶釜」の発端と結末を、それぞれ五つと六つの型に分けたものである。型は計算上は三十できるが、二十一つの型が見られる。なお、「図1」発端●は、人間が動物に畑の作物を荒らされたり、舟に積んだ魚の目をくり抜かれたりして被害を被ることを指している。まず、「表2」より、以下のことがいえよう。

I 「文福茶釜」は、ほぼ全国に分布しており、110〜118福岡県ではお三嬢狐と又左衛門、119・120佐賀県では鏡山のおさん狐と勘右衛門という独自の話が伝承されている。

II 群馬県の茂林寺が昔話の中に取り込まれている地域は、46群馬県伊勢崎市の48埼玉県川越市の61新潟県新発田市の66富山県黒部市、68長野県小県郡、95岡山県阿哲郡、106愛媛県北宇和郡である。

III 群馬県の茂林寺以外の寺院が登場しており、寺院の縁起の中に茶釜の話が入り込んでいる。

「表2」に見出せる茂林寺以外の寺院は、以下の通りである。

① 正法寺(曹洞宗、岩手県水沢市黒石町正法寺)

〔表2〕「文福茶釜」伝承分布表

| 番号 記号 | 伝承地 | 人間 | 動物 | 動物が化けた姿 | 茶釜の譲渡先 | 備考 | 資料名 |
|----------|--------------------|------------|----|-------------------|---------------------|-----------------------------|--------------------|
| 1 ◎ | 青森県五所川原市 | 爺 | 狐 | 馬→茶釜 | 寺 | 爺がまいた豆を狐が食べる | 日本昔話通観第二巻 |
| 2 ◎ | 三戸郡五戸町 | 爺 | 狸 | ぶんどく茶釜 | 寺 | | 〃 |
| 3 ◎ | 西津軽郡木造町館岡 | 爺 | 貉 | 太鼓→鉄瓶→馬 ↓サイコロ | 寺↓別の寺↓博労 ↓ばくちの仲間 | 爺が豆をまいていると、貉が からかう | 〃 |
| 4 △ | 西津軽郡車力村 | 爺 | 狐 | 茶釜 | 金持ち | 釜がまいた豆を狐が盗む | 〃 |
| 5 × | 西津軽郡車力村牛潟 | 爺と婆 | 狐 | 茶釜 | ある家↓別の家 | 爺と婆が和尚から寺の宝物で ある茶釜を与えられる | 〃 |
| 6 ◎ | 西津軽郡車力村牛潟 | 爺 | 狐 | 馬→茶釜 | ある家↓寺 | 爺がまいた豆を狐が食べる | 〃 |
| 7 × | 西津軽郡車力村富港 | 爺と婆 | 狸 | 黄金の茶釜 | 殿様↓寺 | 爺と婆が宮参りをして茶釜を 与えられる | 〃 |
| 8 ◎ | 西津軽郡車力村富港 | 爺 | 狐 | 金の茶釜 | 大旦那 | 爺がまいた豆を狐が食べる | 〃 |
| 9 ◎ | 南津軽郡石川町大沢 | 爺 | 狸 | 太鼓→茶釜 | 長者↓寺 | 爺がまいた豆を狸が食べる | 〃 |
| 10 △ | 岩手県二戸郡一戸町 | 次郎 | 狐 | 文福茶釜→馬 | 寺↓同じ寺 | 狐は稲荷様になる | 日本昔話通観第三巻 |
| 11 ◎ | 岩手郡岩手町 (旧沼宮内町) | ばくち打ち | 狐 | 釜 | 寺 | | 〃 |
| 12 △ | 江刺市 (旧江刺郡米里村人首) | 博労 | 不明 | 文福茶釜 | 正法寺 | | 〃 |
| 13 × | 江刺市 | 爺 | 狸 | 茶釜 | 寺 | 狸は綱渡りが上手なので、見 世物になる | 〃 |
| 14 △ | 上閉伊郡 | 爺 | 狐 | 茶釜→馬 | 寺↓長者 | 狐が馬に化けた日を命日にし て祀る | 〃 |
| 15 × | 紫波郡矢巾町 (旧煙山村赤林) | もんじゃ の吉 | 狐 | 上等の茶釜 | 山寺 | | 〃 |
| 16 △ | 遠野市土淵町本宿 | 爺と婆 | 狐 | 女→馬→釜 | まっちゃ→馬喰→寺 | 狐を稲荷大明神として祀る | 日本昔話通観第三巻 遠野の昔話 |
| 17 △ | 遠野市 (旧上閉伊郡土淵村) | 爺 | 狐 | 味噌煮釜→青馬 ↓年頃の女房 | 寺↓長者↓別の長 者 | 氏神として祀る | 日本昔話通観第三巻 |
| 18 △ | 遠野市 | 爺と婆 | 狐 | 茶釜→娘→青馬 | 寺↓町の女郎屋 ↓? | 月の十九日に回向する | 〃 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|------------|------|-----------|-----------|-----------|-------------------|--------|-----------|--------------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|-------------------------|--------------------|------------------------|------------------------|----------------|
| 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 |
| ■ | ● | ● | ● | ● | ● | ● | × | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ▢ | ● | ● | ● | ▲ |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 山形県新庄市萩野 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 秋田県北秋田郡森吉町米内沢 | 〃 (宮古市 旧下閉伊郡磯鶏村) | 岩手県遠野市新町 |
| 西置賜郡小国町大石沢 | 西置賜郡飯豊町中津川 | 米沢市 | 米沢市上郷 | 米沢市上郷 | 〃 | 〃 | 仙北郡角館町 | 雄勝郡東成瀬村椿川 | 北秋田郡上小阿仁村南沢 | 北秋田郡阿仁町三枚 | 北秋田郡阿仁町銀山 | 北秋田郡阿仁町萱草 | 北秋田郡阿仁町上小様 | 北秋田郡阿仁町笑内 | 北秋田郡阿仁町打当 | 秋田県北秋田郡森吉町米内沢 | 〃 (宮古市 旧下閉伊郡磯鶏村) | 岩手県遠野市新町 |
| 層 | 骨董屋 | 和 | ある人 | 骨董屋 | 爺 | 爺と婆 | 古物屋 | 炭焼き三太 | 爺 | 爺 | 爺と婆 | 爺と婆 | 爺 | 爺と婆 | 爺と婆 | 爺と婆 | 男 | なし |
| 狸 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狸 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 貉 | 狐 | 狐 | 貉 | 狐 | 狐 | 狐 |
| 茶釜 | 南部釜 | 文福茶釜 | 文福茶釜 | 美しい銀の文福茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 赤茶釜↓馬 | 茶釜↓種馬 | 茶釜 | 金の茶釜↓馬 | 茶釜↓種馬 | 銀の茶釜 | 金の文福茶釜↓馬 | 茶釜↓馬 | 釜 | 茶釜↓馬 |
| 隣村の寺 | 寺 | 和尚の寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺↓百姓多助 | 新屋敷の寺 ↓前田の加賀屋 | 寺 | 町の寺↓金持ち | 新屋敷の寺 ↓前田の加賀屋 | 町 | 寺↓同じ寺 | 寺↓親方の家 | 寺 | 寺↓殿様 |
| 狸は文福茶釜の綱渡りを見せる | | | | | | | | | 爺が豆をまいていてと狐がい やがらせをする | 爺が豆をまいていてと狐が 食べる | 爺が豆をまいていてと狐が 食べる | 爺が豆をまいていてと狐が 食べる | 爺が豆をまいていてと狐が 食べる | 爺と婆が豆をまいていてと狐 が邪魔をする | 爺と婆が作った豆を狐が食 べる | 爺が豆をまいていてと、狐が 悪態をつく | | 三月十九日は稲荷様のはじまり |
| 〃 | 日本昔話通観第六巻 | 〃 | 日本昔話通観第六巻 | 〃 | 日本昔話通観第六巻 | 日本昔話通観第六巻 雀の仇討 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第五巻 | 〃 | 日本昔話通観第三巻 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------|----------------|---------------------|-------------|---------------|---------------|------------------------|-----------------------------|------------------------|--------------------|---------------|----------------|--|---------------|-------------|--------------------------|------------|--------------|
| 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 |
| ◆ | ■ | × | ◆ | × | × | × | × | ▲ | ■ | ● | × | × | ▲ | ■ | ■ | ▲ | ■ | ■ |
| 新潟県古志郡山古志村虫亀 | 〃 大田区八幡塚 | 東京都大田区八幡塚 | 〃 成田市宝田 | 〃 流山市野々下 | 〃 長生郡長柄町大庭 | 〃 長生郡長柄町上野 | 千葉県市原市 (旧市原郡富山村) | 〃 (旧比企郡伊草村上伊草) | 埼玉県川越市 (旧入間郡山田村上谷山) | 〃 伊勢崎市 | 群馬県吾妻郡六合村入山地区 | 栃木県上都賀郡栗野町布施谷下 | 〃 南会津郡館岩村貝原 | 〃 田村郡船引町春山 | 福島県郡山市湖南町三代 | 〃 最上郡最上町富沢立小路 | 〃 東根市長瀬 | 山形県西置賜郡白鷹町折居 |
| 爺 | 屑 屋 | な し | 木樵り爺 | な し | ある人 | 若い夫婦 | 茶の湯の 好きな和 尚 | 上州立山 の道具屋 | 屑 屋 | 中台寺 | 古物買い | ボロ屋 | 古道具屋 | 爺 | 和 尚 | 爺 | 爺と婆 | 旅 人 |
| 狐 | 狸 | 狸 | 子狐 | 狸 | 貉 | 狸 | 狸 | 狸 | 文福茶釜 | 狸 | 狸 | 不明 | 狸 | 狸 | 狸 | 狐 | 狐 | 狐 |
| 袈裟と茶釜 きれいな七丈の | 茶釜 | 茶釜 | 唐金の茶釜 ↓娘馬 | 茶釜 | 茶釜 | 文福茶釜 | 文福茶釜 | 茶釜 | 文福茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 鉄瓶 | 古釜 | 茶釜 ↓つき鐘 | 鉄瓶 | 金の茶釜 ↓美し い女馬 | 茶釜 | 茶釜 |
| 寺↓別の寺 | | 寺 | 寺↓町の女郎屋 ↓長者 | 寺 | 寺 | 店 | 屑屋 | もりん寺 | 寺 | 館林の寺↓屑屋 | 寺 | 寺 | 寺 | 長者↓寺 | 和尚の寺 | 寺↓江戸吉原の女 郎屋↓殿様 | 寺 | 寺 |
| 袈裟と茶釜を売った金で爺と 狐は油揚げの御馳走を食べる | 狸は手足を出して綱渡りをし て見世物になる | 狸は綱渡りをして見世物になる | 爺は福徳長者としてあがめら れた | | | | 狸は見世物小屋で軽業や踊の 芸当をする | 爺は中国から来た「しょう」とい う金でできている | 文福茶釜は芝居小屋を建てて もらう | 茶釜が綱渡りをする | 狸が綱渡りをする | 鉄瓶が綱渡りをする | 狸が寺の和尚にだまされ、釜 に化けて仕返しをする。狸は 世話になった古道具屋のため に芸をする | | | 爺は月の十日ずつ赤飯をあげ て氏神様を拝む | | |
| 日本昔話通観第十巻 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第九巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第九巻 | 伊勢崎市史民俗調査報 告第六集 | 〃 | 日本昔話通観第八巻 | 会津館岩村民俗誌 | 〃 | 日本昔話通観第七巻 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第六巻 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-------------------------|----------------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|-----------|------------|------------|-------------------|-------------|-------------|-----------------------|--------------|-------------------------------|-----------------|-------------|-----------------|---------------------|
| 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 |
| ⊕ | × | ⊕ | ⊕ | ⊕ | ◆ | × | ⊕ | ⊕ | × | ◆ | ⊕ | ◆ | × | × | × | ⊕ | ◆ | × |
| 兵庫県津名郡淡路町岩屋 | 〃 (高石市 (旧泉北郡取石村)) | 〃 (貝塚市 (旧泉南郡西葛城村藩原)) | 大阪府和泉市 (旧泉北郡和泉村) | 三重県志摩郡志摩町 (旧片田村大野) | 岐阜県惠那市東野 | 〃 伊那地方 | 長野県小県郡武石村 | 石川県鹿島郡熊登島町 | 〃 婦負郡八尾町 | 〃 小矢部市埴生 | 富山県射水郡小杉町黒河 | 〃 南魚沼郡六日町原 | 〃 長岡市西蔵王町 | 〃 新発田市下羽津 (旧北蒲原郡川東村下羽津) | 〃 佐渡郡赤泊村腰細 | 〃 佐渡郡相川町 | 〃 柏崎市折居北向 | 新潟県柏崎市 (旧刈羽郡鶴川村) |
| 舟の乗り 組み員 | かんこう | 炭焼き | 山奥の炭 焼き | 寺 | なし | 屑屋の爺 | 茂林寺の 和尚 | サンニ モンの | 茂林寺 | なし | 旅の籠屋 | 龍の爺 | ばくち打ち | 茂林寺 | 屑 屋 | 爺 | なし | 爺と婆 |
| 狸高山の | 狸 | 狸 | 狸 | 狸 | 狐と狸 | 狸 | 狸 | 狐 | 不明 | 狸 の狐 | 狸 | 山の狐 | 狐 | 狸 | 狸 | 貉 | 狐と狸 | 狸 |
| 茶釜 | 金の茶碗 | クワンソ(茶釜) | くわんそ(茶釜) | 茶釜 | 狐↓金の茶釜 狸↓商人 | 茶釜 | 茶釜 | 金の茶釜 | 文福茶釜 | 茶釜 | 釜 | 茶釜 | 茶釜 | 文福茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 狸↓狐↓女 狸↓文福茶釜 | 金の茶釜 |
| 大阪の寺 | 寺 | 寺 | 村の寺 | ある人 | 寺 | 寺 | 屑屋 | 七屋の旦那 | 屑屋 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 見世物 | ある人 | 寺 | 料理屋 屑屋↓寺 | 寺 |
| 狸は舟に積んだ鯛の目をくりぬく | | | | 狸を見世物にする | 狐と狸は茶釜を売った金で油揚げや酒を買った | | 軽業をし、大当りする | | 舞台を作って、茶釜に綱渡りをさせる | | 狸を見世物にする | 茶釜を売った金で、爺と狐は油揚げ飯を食べる | | 茶釜は前にいなくなった寺男で、正体は狸であつた | 狸に綱渡りをさせ、見世物にした | | | |
| 日本昔話通観第十六巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十五巻 | 日本昔話通観第十三巻 | 〃 | 日本昔話通観第十二巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十一巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十巻 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----------|---------------------|------------|------------|------------|------------|----------|------------|---|------------|---------------|--|------------|---------------|------------|----------|---|---------------------------------------|
| 94 | 93 | 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 |
| ◆ | ● | ● | × | × | ■ | ● | × | × | ○ | ▲ | × | ■ | × | ■ | × | × | ◆ | ● |
| 岡山県阿哲郡神郷町三室 | 〃 飯石郡掛合町 | 島根県大田市 (旧迦摩郡大森町) | 〃 岩美郡国府町玉鉢 | 〃 日野郡日南町福神 | 〃 八頭郡用瀬町用瀬 | 〃 八頭郡用瀬町松原 | 〃 八頭郡智頭町 | 〃 八頭郡河原町山手 | 〃 八頭郡若桜町若桜 | 〃 東伯郡東伯町矢下 | 〃 東伯郡赤碕町大熊 | 〃 西伯郡大山町高麗 | 鳥取県西伯郡会見町 | 〃 美方郡美方町秋岡 | 〃 美方郡美方町秋岡 | 〃 美方郡温泉町 | 〃 津名郡北淡町 | 兵庫縣津名郡北淡町育波 |
| 腹のへつ た男 | ある家 | 爺 | なし | 不明 | 金屋村の 夫婦 | 爺 | 爺 | | 隣の爺 | 博 労 | とくさ爺 と婆 | 穢い爺 | 爺と婆 | 鹿一郎 | 貧乏な家 | なし | 洲本炬ノ 口の漁師 | 不明 |
| 狸 | 狐 | 狐 | 狸 | 狐 | 狐 赤松の | 狸 | 狸 | 狸 | 狸 | 狐 | 狸 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狸 佐野の のシワ エモン | 狸 佐野 のシワ エモン |
| 金の茶釜 | 茶釜 | 金の茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 金の茶釜 | 文福茶釜 | 金の茶釜 | 茶釜 | 金の茶釜 | 茶釜 | 金のかんす (茶釜) | かんす (茶釜) | かんす (茶釜) | 金のかんす (茶釜) | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 茶釜 | 茶釜 |
| 寺 | 寺 | 旅の者↓寺 | 寺 | 寺 | 用瀬 | | 寺 | 屑屋↓寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 古道具屋↓寺 |
| | | | | | | | | | 狸が作物を荒らすので、爺が 捕まえて狸汁にしようとする と、隣の爺が助ける | | | 観音に化けた狸を見破るた め、寺の小僧は観音の口にご 飯粒を塗る | | | | | 狸は爺に化け、舟に積んだ鯛 の目をくりぬく。後に狸は道 頓堀に芝居を見に行き、犬に 殺される | 狸は侍に化け、船に積んだ鯛 の目をくりぬく。大阪の文楽 を見る |
| 日本昔話通観第十九巻 | 〃 | 日本昔話通観第十八巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十七巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十六巻 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|---------------------------|---------------------------|-------------------|-------------------|----------|----------------|--------------|-----------------------|---------------|------------------|-------------------|------------------|------------|---------------|-------------|---------------|-------------------------------|---------------------------|
| 113 | 112 | 111 | 110 | 109 | 108 | 107 | 106 | 105 | 104 | 103 | 102 | 101 | 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 |
| ⊙ | ⊙ | ⊙ | ⊙ | ⊙ | ⊙ | × | × | × | ⊙ | ⊙ | ◆ | ⊙ | ⊙ | ⊙ | ◆ | × | × | × |
| 〃 鞍手郡 | 〃 福岡市西区 (旧早良郡早良町飯場) | 〃 福岡市 (旧粕屋郡多々良村多々良) | 福岡県 | 〃 幡多郡大方町出口 | 高知県須崎市鳴無 | 〃 上浮穴郡柳谷村永野 | 愛媛県北宇和郡三間町戸雁 | 香川県香川郡香川町 (旧浅野村道端) | 〃 海部郡穴喰町久保 | 〃 三好郡西祖谷山村田の内 | 徳島県三好郡東祖谷山村中上 | 〃 比婆郡高野町岡大内大野 | 広島県比婆郡比和町 | 〃 真庭郡八束村花園 | 〃 新見市下熊谷 | 〃 小田郡矢掛町矢掛 | 〃 小田郡美星町東水砂古尾 | 岡山県阿哲郡哲西町川南 |
| 又平 | ある男 | なし | 又左衛門 | 船頭 | 商人 | なし | 貧乏な家 | なし | 彦佐 | 讃岐の商人 | ある男 | 正直な男 | 馬追い | 山伏 | とんちのある男 | 大光寺の小僧 | 正直な爺と婆 | 古道具屋 |
| 女狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 狸 | 狸 | 狐 | 狸 | 狸 | 狸 | 狸 | 狸の子 | 狐 | 狐 | 狐 | 狐 | 不明 | 不明 | 狸 |
| 金の茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 金の文福茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 茶釜 | 文福茶釜 | 金の茶釜 | 金の釜 | 繻子の帯↓茶釜 ↓茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | 金の茶釜 | かんす(茶釜) | 泥のかんす (茶釜) | 文福茶釜 |
| 寺 | 金持ちの隠居 | 寺 | 隠居 | 寺 | 寺 | 寺 | 屑屋↓茂林寺 | 寺 | 寺 | 寺 | 金持ちの男↓別の男↓鍛冶屋 | 寺 | 寺 | 寺 | 京の長者 | | 大通寺(矢掛町) | 茂林寺↓屑屋 |
| 又平に女狐が娘にしてくれと言う | 男は、婆に化けた狐を馬に乗せる | 寺の小僧忠吉は、花嫁を馬に乗せる | 又左衛門は娘に化けた狐を馬に乗せる | 狸は帆前船に積んだ鱈の目をくりぬく | | | | | | | 鍛冶屋は茶釜を槌でなぐり、狸は死ぬ | | | | | 小僧がかんすを拾う | 爺婆は観音から茶釜を与えられ、茶店を開く。後に釜を寺へ返す | 狸は綱渡りをする。茶釜は現在茂林寺の宝になっている |
| 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第二十三巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第二十二巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第二十一巻 | 〃 | 日本昔話通観第二十巻 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 日本昔話通観第十九巻 |

| | | | | | | | | |
|-----|---|---------------------|-----------------------|--------------|-----------------|---------------|-------------------------------|-------------|
| 125 | ▽ | 宮崎県宮崎郡清武町南加納 | 百姓 | 狐 | 金のかのす (茶釜) | 長者 | 尻尾を焼かれた狐は百姓に仕返しをする | 〃 |
| 124 | △ | 熊本県球磨地方 | 博 労 | 原の狐 よしのん | 名馬↓金の缶子 (茶釜) | 金持ち↓隣国の殿様 | 博労は狐を稲荷大明神として祀り、酒屋を始める | 〃 |
| 123 | □ | 〃 上県郡上対馬町泉 | 貧乏和尚 | 狸 | 茶釜 | ある家 | | 〃 |
| 122 | △ | 〃 老岐郡郷ノ浦町 (旧渡良村) | 芦辺の商人 人夷伊 | 狐 | 金の茶釜 | 渡良の永平寺 | | 〃 |
| 121 | ▽ | 長崎県南高来郡小浜町富津 | 替 女 | 狐 | 金の缶子(茶釜) | 寺 | 狐は替女に仕返しをする | 日本昔話通観第二十四巻 |
| 120 | × | 〃 唐津地方 | 勘右衛門 | おさん狐 | 黄金の茶釜 | 鏡の恵日寺 | | 〃 |
| 119 | △ | 佐賀県伊万里市付近 | 勘右衛門 | 鏡山の 古狐おさん | 金の茶釜 | 欲坊和尚 | 勘右衛門は鯛を一匹下げ、盲人のふりをして、狐をおびきよせる | 〃 |
| 118 | △ | 〃 宗像郡宗像町 (旧赤間町) | 福岡の馬 方又兵衛 | 狐おさん | 金の茶釜 | 寺 | 又兵衛は娘に化けた狐を馬に乗せる | 〃 |
| 117 | △ | 〃 宗像郡福岡町 | 福岡の馬 方又兵衛 (又せー) | 狐お三嬢 | 金の茶釜 | 分限者新宮の万徳 | 又せーは花嫁に化けた狐を馬に乗せる | 〃 |
| 116 | △ | 〃 宗像郡福岡町 | 又左 | 狐お三嬢 | 金の茶釜 | 新宮の万屋 よろずや | 又左は豪家の娘に化けた狐を馬に乗せる | 〃 |
| 115 | △ | 〃 宗像郡福岡町 | 又左衛門 | 狐お三嬢 | 金の茶釜 | 分限者新宮の万徳 | 又左衛門は豪家の娘に化けた狐を馬に乗せる | 〃 |
| 114 | △ | 福岡県宗像郡玄海町 (旧田島郡) | 又兵衛 | 狐 | 金の茶釜 | 寺 | 又兵衛は娘に化けた狐を馬に乗せる | 日本昔話通観第二十三巻 |

- ② 中台寺(天台宗、群馬県伊勢崎市大手町)
- ③ 大通寺(曹洞宗、岡山県小田郡矢掛町小林)
- ④ 大光寺(曹洞宗、岡山県小田郡矢掛町小林)
- ⑤ 恵日寺(曹洞宗、佐賀県唐津市鏡町)
- ⑥ 永平寺(未詳、長崎県)
- なお、一覧表にはないが、次の三ヶ寺でも茶釜を蔵している。
- ⑦ 常慶院(曹洞宗、山形県米沢市大字南原横堀町)
- ⑧ 東樹院(高野山真言宗、神奈川県横浜市中区港南区笹下)

⑨ 柴屋寺(臨済宗妙心寺派、静岡県静岡市丸子)

以上、九ヶ寺のうち群馬県の茂林寺との関係を説く寺院は、①正法寺と⑦常慶院である。①正法寺では、当寺が火災に見舞われた時、文福茶釜が池の中に飛び込んだという。その時、茶釜の蓋が茂林寺に飛んでいったと伝える。⑦常慶院では、所蔵する茶釜は茂林寺の茶釜とは兄弟茶釜であるとしており、茶釜の由来をまとめた「金花山狐之釜縁起」を蔵している。③大通寺と⑧東樹院、⑨柴屋寺は、茂林寺との関わりは薄く、文福茶釜の由緒を記した縁起も遺されていないが、湯

〔図1〕「文福茶釜」伝承分布図



〔表3〕「狸和尚」伝承分布表

| 番号 | 伝承地 | 化けた姿 | 正体 | 備考 | 資料名 |
|----|-------------------------|-----------------|----|--------------------------|-------------------------|
| 1 | 宮城県本吉郡本吉町 (旧小泉村) | 和尚 | 古貉 | | 小泉の民俗 (東洋大学民俗研究会) |
| 2 | 福島県大沼郡三島町川井 | 和尚 | 白狐 | | 日本昔話通観第七巻 |
| 3 | 〃 福島市 (旧信夫郡鎌田村) | 稲荷山正福寺にいる身分が低い僧 | 狐 | 狐は釈迦が説法をする図を描いて寺を去る | 〃 |
| 4 | 東京都板橋区 (旧志村) | 和尚 | 狸 | 某家に白沢の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 5 | 〃 府中市 | 安養寺の寺男 | 狸 | 狸は釈迦の説法を再現し、釈迦の説法のメモ帳を遺す | 東京民話 |
| 6 | 〃 府中市住吉町 | 安養寺の小僧 | 狸 | 寺に狸が書いた書物を遺す | 府中の口伝え集 |
| 7 | 〃 府中市住吉町 | 高安寺の小坊主 | 不明 | | 府中の口伝え集 |
| 8 | 〃 八王子市追分町 | 建長寺の坊さんの女房 | 狐 | | 日本昔話通観第九巻 |
| 9 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡加住村高月) | 和尚 | 不明 | 円通寺に布袋渡河の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 10 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡加住村宮下) | 和尚 | 狸 | 宮下の地に白沢の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 11 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡川口村下川口) | 和尚 | 狸 | 小谷田登一家に書を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 12 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡恩方村小高井) | 和尚 | 狸 | 大塚某家の隣家に白沢の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 13 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡恩方村原宿) | 和尚 | 不明 | 石田延平家に白沢の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 14 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡浅川町) | 和尚 | 狸 | 鈴木重信家に白沢の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 15 | 〃 八王子市 (旧南多摩郡由木村) | 和尚 | 狸 | 某家に書を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 16 | 〃 秋川市 (旧西多摩郡東秋留村小川) | 和尚 | 貉 | | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |
| 17 | 〃 福生市 (旧西多摩郡福生町) | 和尚 | 狸 | | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五巻 |

| | | | | | | |
|----|---|-----------------------------|-----------|------|----------------------|-------------------------|
| 40 | 〃 | 東八代郡御坂町 | 建長寺の使僧 | 古 貉 | 口に筆をくわえて書いたものを遺す | 日本伝説大系第五卷 |
| 39 | 〃 | 西八代郡上九一色村 | 建長寺の和尚 | 古 貉 | | 〃 |
| 38 | 〃 | 西八代郡上九一色村 | 山寺の和尚 | 裏山の狸 | | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 37 | 〃 | 西八代郡市川大門町黒沢 (旧大同村黒沢) | 建長寺の住職 | 古 狸 | 高野某家に恵比寿大黒の絵を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五卷 |
| 36 | 〃 | 西八代郡市川大門町黒沢 | 建長寺の貫主 | 狸 | | 〃 |
| 35 | 〃 | 南巨摩郡中富町大塩 | 建長寺の名僧 | 貉 | | 〃 |
| 34 | 〃 | 中巨摩郡田富町東花輪 | 建長寺の代僧 | 古 狐 | 貴蔵院に來山する | 日本伝説大系第五卷 |
| 33 | 〃 | 山梨県韮崎市清哲町青木 (旧北巨摩郡清哲村青木) | 建長寺の住持 | 古 狸 | 古狸は松が枯死すると予言し、松の絵を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五卷 |
| 32 | 〃 | 新潟県南蒲原郡本成寺村 | あんじょ様(女僧) | 狸 | | 〃 |
| 31 | 〃 | 足柄下郡箱根町箱根 | 和尚 | 狸 | 旧本陣に書いたものを遺す | 〃 |
| 30 | 〃 | 津久井郡津久井町三ヶ木 | 和尚 | 狸 | 内田亀作家に書き遺す | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 29 | 〃 | 津久井郡津久井町青根 | 寺の住職 | 狸 | | 〃 |
| 28 | 〃 | 津久井郡津久井町青根 | 建長寺の和尚 | 狸 | | 〃 |
| 27 | 〃 | 津久井郡相模湖町 | 和尚 | 貉 | | 日本昔話通観第九卷 |
| 26 | 〃 | 津久井郡相模湖町小原 | 和尚 | 狸 | 旧小田原宿の本陣清水融次郎家に書を遺す | 〃 |
| 25 | 〃 | 津久井郡相模湖町千木良 | 和尚 | 狸 | 布袋川渡りの図を遺す | 〃 |
| 24 | 〃 | 津久井郡相模湖町若柳宇奥畑 | 和尚 | 狸 | 榎本鉄之助家に書を遺す | 〃 |
| 23 | 〃 | 津久井郡藤野町佐野川 | 和尚 | 狸 | | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 22 | 〃 | 秦野市蓑毛 | 建長寺の和尚 | 不明 | | 〃 |
| 21 | 〃 | 鎌倉市山ノ内 | 圓覚寺の坊さん | 不明 | 鎌倉圓覚寺山門建立のための寄進を募る | 〃 |
| 20 | 〃 | 藤沢市石川 | お坊さん | 貉 | | 日本昔話通観第九卷 |
| 19 | 〃 | 神奈川県横浜市旭区 | 旅の僧 | 狸 | 桜井家に掛軸を遺す | 日本伝説大系第五卷 |
| 18 | 〃 | 東京都青梅市 (旧西多摩郡青梅町) | 和尚 | 狸 | 白鷺の図を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五卷 |

| | | | | | | |
|----|---|-------------------------|-----------|----|---------------------|--------------------------|
| 62 | 〃 | 静岡市 | 建長寺の高僧 | 貉 | 名主の保崎孫右衛門家に掛軸を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本昔話通観第十三卷 |
| 61 | 〃 | 賀茂郡賀茂町 (旧宇久須村) | 建長寺の貫主 | 大狸 | 伊豆の寺や旧家に鹿の絵を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本昔話通観第十三卷 |
| 60 | 〃 | 賀茂郡南伊豆町 | 建長寺の管長 | 狸 | | 〃 |
| 59 | 〃 | 賀茂郡松崎町野田 | 建長寺七代目の管長 | 狸 | | 〃 |
| 58 | 〃 | 賀茂郡松崎町石部 | 建長寺の大和尚 | 狸 | | 日本昔話通観第十三卷 |
| 57 | 〃 | 賀茂郡松崎町 (旧中川村) | 建長寺の僧 | 狸 | | 神奈川県昔話集第二冊 日本昔話通観第十三卷 |
| 56 | 〃 | 静岡県賀茂郡松崎町山口 | 大僧正 | 狸 | | 〃 |
| 55 | 〃 | 大野郡丹生川村坊方 | 名僧 | 貉 | | 日本昔話通観第十三卷 |
| 54 | 〃 | 岐阜県益田郡川西村上田 | 名僧 | 老狸 | 奥田信吉家に狸の書を遺す | 〃 |
| 53 | 〃 | 北安曇郡南小谷村黒川 | 坊様 | 貉 | 南原家に六曲の屏風の字を書いて遺す | 〃 |
| 52 | 〃 | 北安曇郡神城村飯田 | 京都の高僧 | 貉 | 庄屋横川駒吉家にお墨つけを遺す | 〃 |
| 51 | 〃 | 北安曇郡社村宮本 | 鎌倉の大僧正 | 古狸 | 某家に字体不明の掛物を遺す | 〃 |
| 50 | 〃 | 北安曇郡会染村中島 | 大徳寺の僧 | 貉 | 南家に万国春という掛図を遺す | 〃 |
| 49 | 〃 | 北安曇郡七貴村上押野 | 上人様 | 不明 | 巻物を遺す | 〃 |
| 48 | 〃 | 東筑摩郡中山村埴原字西越 | 建長寺の僧 | 狸 | 下里松雄家に狸の書を遺す | 〃 |
| 47 | 〃 | 下伊那郡泰阜村 | 高僧 | 狸 | 温田家に三つ眼の怪物の絵を遺す | 〃 |
| 46 | 〃 | 更埴市杭瀬下 | 僧 | 貉 | 一筆遺す | 〃 |
| 45 | 〃 | 長野県松本地方 | 僧 | 狸 | 立派な字を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 44 | 〃 | 南都留郡道志村久保 | 建長寺の住職 | 古貉 | 大家に小倉百人一首を書いて遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五卷 |
| 43 | 〃 | 北都留郡上野原町鶴川 | 高僧 | 古狸 | | 〃 |
| 42 | 〃 | 山梨市一町田中 | 建長寺の貫主 | 貉 | 名主佐藤新左衛門家に稲穂に鷹の絵を遺す | 日本伝説大系第五卷 |
| 41 | 〃 | 山梨県甲府市山城町 (旧西山梨郡山城町) | 建寺長の方丈様 | 古貉 | 名主の家に筆跡を遺す | 神奈川県昔話集第二冊 日本伝説大系第五卷 |

| | | | | |
|----|------------------------|--------|----|--------------------------|
| 63 | 静岡県静岡市 | 旅の僧 | 狸 | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 64 | 静岡県市 | 建長寺の僧 | 狸 | 〃 |
| 65 | 静岡市西脇 | 和尚 | 貉 | 〃 |
| 66 | 静岡市下島 | 建長寺の和尚 | 貉 | 〃 |
| 67 | 清水市能島 | 和尚 | 狸 | 〃 |
| 68 | 富士市田子浦 (旧富士郡田子浦村) | 安養寺の住職 | 大狸 | 神奈川県昔話集第二冊 日本昔話通観第十三卷 |
| 69 | 富士市北山 (旧富士郡北山村) | 村の和尚 | 古貉 | 神奈川県昔話集第二冊 |
| 70 | 富士宮市杉田 (旧富士郡富士根村杉田) | 安養寺の僧 | 貉 | 〃 |
| 71 | 庵原郡富士川町中之郷 | 安養寺の住職 | 古狸 | 〃 |
| 72 | 安部郡美和村松野 | 坊さん | 狸 | 〃 |

が汲めども汲めども尽きないため、「文福茶釜」と名付けている。また、⑤恵日寺では、現在、茶釜を所蔵していない。これらの九ヶ寺のうち、五ヶ寺の宗派が曹洞宗であることは看過できないが、曹洞宗と文福茶釜の関わりについては後述するため、ここでは触れない。

次に「図1」より以下のことがいえよう。

I ■は巖谷小波の『日本昔話』に当たりますが、意外に昔話の採録の中にでてこない。

II ◎と▲は基本型で、かなり広い地域で伝承されている。

III 「文福茶釜」は全国に分布しているものの、関東や中部、近畿では事例が少ない。

ところで、「文福茶釜」と同様に狸を構成要素とする話に、「狸和尚」がある。この話は、和尚に化けた狸（または貉）が旅に出て、泊った家に謝礼として口や尾等で書いた書画を遺す。しかし、犬を嫌い、食事や入浴の様子が奇妙なため人々に怪しまれ、ついに狸の正体を現わ

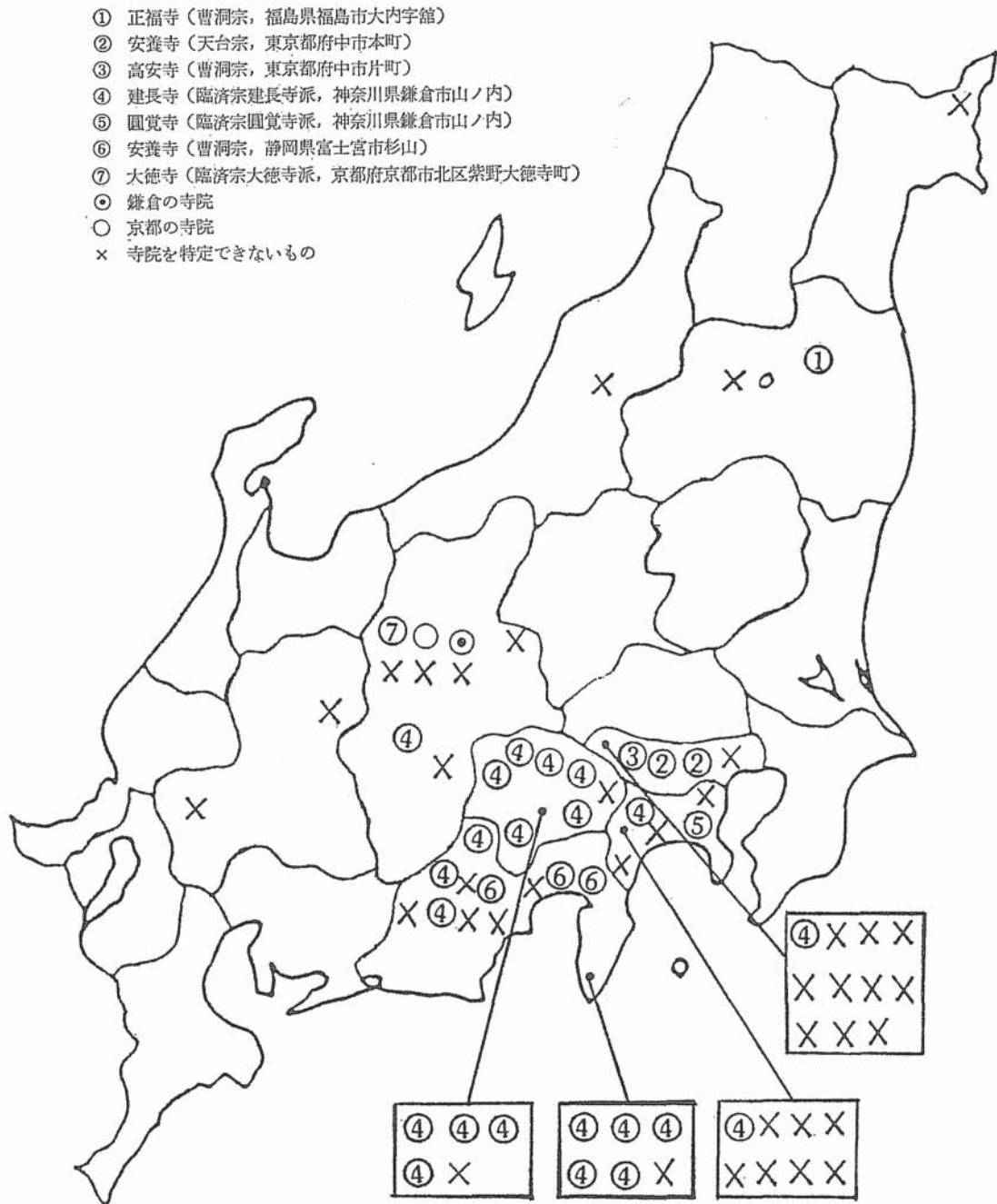
すというものである。この「狸和尚」は、近世の文献では文政四年（一八二一）序の『甲子夜話』巻五十一、文政八年（一八二五）刊の『兎園小説』第五集「古狸の筆蹟」、文化八年（一八一二）刊の『燕石雜志』巻五上の二等が知られ、いずれも書画にまつわる話が記されている。「表3」は『神奈川県昔話集』第二冊、『日本伝説大系』、『日本昔話通観』から「狸和尚」の話抜き出し、一覧表にしたものである。但し、狸（または貉）が化ける人間は和尚に限定し、公家や殿様に化ける事例は省いた。この表から以下のことがいえよう。

I 「狸和尚」の分布は、東京、神奈川、山梨、長野、静岡の五都県に集中し、宮城、福島、新潟、岐阜の諸県にも見出せる。

II 狸（または貉）は、正福寺、高安寺、建長寺、圓覚寺、安養寺（二ヶ寺）、大徳寺の和尚に化けている。

I については、既に『神奈川県昔話集』第二冊で指摘されている。しかし、前述の「文福茶釜」と対照させると、興味深い事実が浮かび

〔図2〕「狸和尚」伝承分布図



あがってくるのである。「文福茶釜」の昔話は、関東や中部、近畿に事例が少ない。つまり、「文福茶釜」の事例が少ない地域に、「狸和尚」の話が多いのである。Ⅱについてはこれまで鎌倉市の建長寺や富士宮市の安養寺、京都市の大徳寺のみが注目され、福島市の正福寺、府中市の安養寺と高安寺、鎌倉市の圓覚寺は看過されてきている。これら七ヶ寺の宗派と所在地は、以下の通りである。

- ① 正福寺（曹洞宗、福島県福島市本内字館）
 - ② 安養寺（天台宗、東京都府中市本町）
 - ③ 高安寺（曹洞宗、東京都府中市片町）
 - ④ 建長寺（臨済宗建長寺派、神奈川県鎌倉市山ノ内）
 - ⑤ 圓覚寺（臨済宗圓覚寺派、神奈川県鎌倉市山ノ内）
 - ⑥ 安養寺（曹洞宗、静岡県富士宮市杉山）
 - ⑦ 大徳寺（臨済宗大徳寺派、京都府京都市北区紫野大徳寺町）
- これら七ヶ寺の宗派は、おおむね禅宗に片寄っていることがわかる。〔図2〕は〔表3〕をもとに、七ヶ寺を伝承する地域の広がりを見たものである。この分布図から以下のことがいえる。

- I 福島県の①正福寺、府中市の②安養寺と③高安寺、鎌倉市の⑤圓覚寺は、それほど広い地域で伝承されているわけではない。
- II 鎌倉市の④建長寺は、神奈川県津久井郡、山梨県、静岡県静岡市・賀茂郡を中心とする広い地域で伝承されている。
- III 富士宮市の⑥安養寺は、静岡県の富士宮市を中心とする地域で伝承されている。
- IV 京都市の⑦大徳寺は、長野県北安曇郡を中心とする地域で伝承されている。

現在、鎌倉市の④建長寺には、安永四年（一七七五）、第二百一世萬拙碩誼の代に再建された三門（山門）が遺っている。この三門は別名「狸の山門」と呼ばれ、当寺で育てられた古狸が、その恩に報いるため、和尚に身を変え、三門建立の勸進をしたと伝えられている。また、当寺では、狸和尚の姿を描いたと伝える「狸和尚像」一幅を蔵し、十一月

初旬に行われる宝物風入れの時に公開されている。この「狸和尚像」は、文政四年（一八二一）序の『甲子夜話』巻五十一に載せられているが、『甲子夜話』では、狸が描いた布袋の図であると記されている。以上から建長寺では、「狸和尚」の伝承を積極的に取り入れていることがわかる。同様のことは富士宮市の⑥安養寺についてもいえ、当寺では尻尾が付いた狸の姿をかたどった花押付きの書簡を所蔵している⁽³³⁾。この書簡は大永四年（一五二四）に当山住職秀睦に狸が差し出した礼状で、天保四年（一八三三）の写本である。

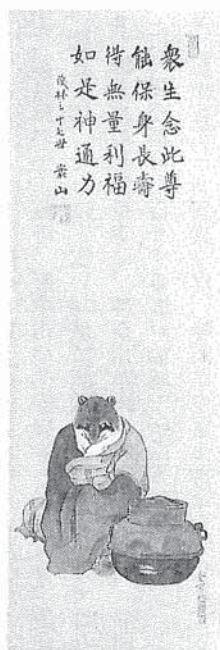
現在、狸和尚の伝承がとだえている寺院は、府中市の③高安寺、鎌倉市の⑤圓覚寺、京都市の⑦大徳寺である。この三ヶ寺では狸和尚に関する文書等も所蔵していない。しかし、文政八年（一八二五）刊の『兎園小説』第五集「古狸の筆蹟」⁽³⁴⁾には、京都紫野大徳寺の勸化僧が武州多摩郡国分寺村（現東京都国分寺市）の名主儀兵衛の家に狸の筆跡を遺したと記されている。そして、現在も国分寺市の本多家では狸の筆跡を所蔵しているという。⑦大徳寺の場合には、近世末には存在した狸和尚の伝承が、現在は寺院側ではとだえてしまったが、狸和尚が出向いた地域では、現在もその伝承が息づいているといえよう。

おわりに

曹洞宗大林派の総本寺茂林寺は、群馬県館林市にあり、分福茶釜の寺として知られてきた。群馬県下で分福茶釜の由緒を説く寺院には、茂林寺以外に、高源寺（邑楽郡邑楽町）、嶽林寺（利根郡月夜野町）、青龍寺（吾妻郡吾妻町）、中台寺（伊勢崎市）、応声寺（館林市）の五ヶ寺が知られ、最初は自分の所にあった茶釜（または狸）が、後に茂林寺へ移ったと説く寺院が多い。群馬県に、こうした分福茶釜の伝説が多々見られる要因には、絵本や童話を通して茂林寺が著名であったことはいままでもないが、近くにある天明釜の産地（栃木県佐野市）

の存在も大きいと考えられる。

近世には、享保五年（一七二〇）初演の浄瑠璃『双生隅田川』や享保年間（一七一六～三六）頃刊の赤本『文福茶釜』等、文福茶釜を取り入れた様々な文芸作品が生み出された。しかし、茂林寺では老僧守鶴が貉（または狸）の化身であり、分福茶釜に変身することはないと伝承しているのに対し、これらの文芸作品のほとんどでは守鶴が存在せず、貉（または狸）が文福茶釜に化けている。



〔写真4〕
茂林寺蔵分福茶釜掛軸

狸（または狐）が文福茶釜に化ける「文福茶釜」の話は、近世の文芸作品で有名になり、近代に入ると、巖谷小波によってさらに広がった。しかし、小波の狸が人間に助けられ、綱渡りをする型は、意外に昔話の採録の中には出てこない。昔話では、むしろ狸（または狐）のいたずらの一環として捉えられている。昔話「文福茶釜」の分布は、ほぼ全国にまたがるが、関東や中部、近畿には事例が少ない。この地域は「狸和尚」の分布圏であり、「文福茶釜」と「狸和尚」の分布が二分できるといえる。「文福茶釜」と「狸和尚」を伝承する寺院の宗派は、禅宗、とりわけ曹洞宗が多い。曹洞宗は豊川稲荷の妙厳寺（愛知県豊川市）でわかるように、民間信仰色の濃いことで知られている。そして、源翁心昭と殺生石、了菴慧と大山明神のように禅僧との因縁話を作り出し、布教の手段として用いた。⁽³⁵⁾ 茂林寺の場合には、守鶴と分福茶釜の説話を作り上げ、近世には開帳や縁起の版行をし、近代、特に昭和に入ってから積極的に分福茶釜をアピールするようになった。例えば、三十七世瑞雲寶山の時には、狩野斐石に絵を描かせ

た掛軸〔写真4〕を販売し、また、現住職三十九世大雲正山師の時には、昭和三十八年から四十二年にかけて狸祭を行っている。映画「分福茶釜」のロケがあったのも昭和三十八年である。現在は伴淳三郎が吹き込んだテープが、随時分福茶釜の前で流れている。曹洞宗の各派の中でも、特に通幻派は禅僧との因縁話を作り出した派として知られている。しかし、「文福茶釜」や「狸和尚」を伝承する寺院は、曹洞宗においては特定の派に偏らない。むしろ曹洞宗の各派で文福茶釜を取り込んでいったと見るべきであろう。

註

- (1) 『群馬県史』史料編七 中世三 一九四二「後柏原天皇論旨」（群馬県史編さん委員会、昭和六十一年三月）
- (2) 『一話一言』巻四十一「狸塚」（『日本隨筆大成』別巻六 吉川弘文館、昭和五十四年一月）
- (3) 『群馬の歴史と伝説民話』第二集「分福茶釜うらばなし」（群馬歴史散歩の会、昭和五十二年一月）
- (4) 『群馬県史』史料編二十七 民俗三、第二章第二編「高源寺の和尚」（群馬県史編さん委員会、昭和五十五年三月）
- (5) 川島維知「館林・邑楽の民話と伝説」「分福茶釜異聞」（聚海書林、昭和六十年七月）。また、『日本伝説大系』第四巻「文福茶釜」（みずうみ書房、昭和六十一年十一月）にも高源寺の茶釜が取り上げられている。但し『日本伝説大系』以外の資料では、狸である守鶴が茶釜を高源寺から茂林寺に持ち去るとしているのに対し、『日本伝説大系』では、茶釜は狸である守鶴が化けたという伝承を載せている。
- (6) 註(4)『群馬県史』「文福茶釜」参照
- (7) 註(5)『館林・邑楽の民話と伝説』、『日本伝説大系』参照
- (8) 『伊勢崎市史民俗調査報告書』第六集、第二章の三の(二)（伊勢崎市、昭和六十一年十月）
- (9) 註(4)『群馬県史』「茶釜のはなし」参照
- (10) 『増訂武江年表』第一巻（東洋文庫二一六、金子光晴校訂、平凡社、昭和四十三年六月）
- (11) 『甲子夜話』第一、巻三十五（国書刊行会、明治四十三年五月）
- (12) 『群馬県史』資料編十六 近世八、第五章第四節四〇九「年次不詳 邑

- 楽郡堀工村茂林寺分福茶釜略縁起(版) (群馬県史編さん委員会、昭和六十三年十二月)
- (13) 『群馬県邑楽郡誌』(群馬県邑楽郡教育会、大正六年十二月)
- (14) 比留間尚「江戸の開帳」(『江戸町人の研究』第二巻、西山松之助編、吉川弘文館、昭和四十八年六月)
- (15) 『双生隅田川』第四(近松全集)第十二巻、藤井乙男、朝日新聞社、昭和三年十月)
- (16) 志田義秀「文福茶釜の伝説童話」(大東名著選十六『日本の伝説と童話』、大東出版社、昭和十六年十一月)
- (17) 赤本『文福茶釜』(近藤清春画、『稀書複製会刊行稀書』第五期第十八回、米山堂、昭和三年四月)
- (18) 赤本『ぶんぶく茶釜』(国会図書館蔵、『近世子どもの絵本集』江戸篇、鈴木重三・木村八重子編、岩波書店、昭和六十年七月)
- (19) 黄表紙『化物小遣帳』下巻(十返舎一九作、続帝国文庫二十一『校訂一九全集』大橋新太郎、博文館、明治三十三年六月)
- (20) 黄表紙『増補分福茶賀問』(十返舎一九作・画、東京都立中央図書館加賀文庫蔵)
- (21) 狂文集『四方の留粕』(大田南畝作、有朋堂文庫『大田南畝集』、有朋堂書店、大正二年二月)
- (22) 咄本『文武久茶釜』(録山人信普作・画、『小咄研究』六号、小咄研究会、昭和十年五月)
- (23) 俳諧集『文武具茶釜』(大鶴庵塊翁編、早稲田大学図書館蔵)
- (24) 『日本昔噺』第十二編『文福茶釜』(巖谷季雄、博文館、明治二十八年八月)
- (25) 『日本昔話通観』全三十二巻(同朋社、昭和五十二年十月)現在刊行中
- (26) 常慶院については、水野道子氏の『常慶院蔵『金天山狐之釜縁起』』(『伝承文学研究』第十六号、伝承文学研究会、昭和四十九年七月)や『米沢地方説話集』(『伝承文学資料集』第九輯、三弥井書店、昭和五十一年五月)の一連の研究がある。
- (27) 『甲子夜話』第二、巻五十一(国書刊行会、明治四十三年六月)
- (28) 『兎園小説』第五集「古狸の筆蹟」(『日本隨筆大成』第二期の一、吉川弘文館、昭和四十八年十一月)
- (29) 『燕石雜志』巻五上の二「田之怪」(『日本隨筆大成』第二期の十九、吉川弘文館、昭和五十年二月)
- (30) 『神奈川県昔話集』第二冊(神奈川県民俗シリーズ5、神奈川県教育委員会、昭和四十三年三月)
- (31) 『日本伝説大系』全十七巻(みすうみ書房、昭和五十七年一月)平成二年六月
- (32) 註(27)参照
- (33) 遠藤秀男『富士山麓・伝承の旅』第二話「狸寺の怪」(寺田書店、昭和四十五年五月)
- (34) 註(28)参照
- (35) 葉貫磨哉「洞門禪僧と神人化度の説話」(『駒沢史学』十周年記念号、駒沢大学史学会、昭和三十七年十一月)
- 広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』第二章第九節(吉川弘文館、昭和六十年十二月)
- 〔付記〕 本稿を成すに際して、茂林寺三十九世大雲正山師や応声寺四十四世吉田和美師をはじめ、寺院の方々には、多大な御助力をいただいた。また、大島建彦先生、中島恵子氏、水野道子氏、佐野和子氏、船岡誠氏、石田雅彦氏、大嶋一人氏には、御教示にあずかった。記して、心より御礼申し上げる。